

目次

序章 茶文化研究への視座	3
第一章 茶葉生産と新中国の社会主義建設	16
1 建国当初の茶葉状況	18
2 茶葉生産の恢復	22
3 茶葉生産と社会主義工業化	33
4 革命のための茶葉生産	40
第二章 「茶文化」の出現と経済建設	52
1 「茶葉問題」の発生	53
2 「茶文化」ということばの誕生	62
3 茶文化の創造	66
4 茶文化への欲求	72

第三章	台湾茶芸の創出と中国大陆への伝播	86
1	台湾茶芸を育んだ社会変革	87
2	一九七〇年代の台湾茶葉危機	93
3	台湾茶芸の構築	99
4	台湾茶芸の伝播	109
第四章	茶文化ナシヨナリズム	124
1	茶文化から民族文化へ	126
2	民族文化の演出	135
3	学術研究による茶文化操作	141
4	茶文化復興の象徴	159
第五章	茶文化産業	175
1	茶芸館	178
2	茶文化観光	188
3	中国茶文化の消費	200
第六章	中国茶のソフトパワー	216
1	新中国の外交と茶	217

2	茶文化パブリック・ディプロマシー	224
3	日本における「中国茶」の受容	232
	終章 中国茶文化の可能性	254

あとがき

参考文献

索引

序章 茶文化研究への視座

はじめに

二〇〇八年八月八日午後八時、中国で初めてとなる夏季オリンピック大会が北京で始まった。開会式セレモニーの熱狂が高まる中、突然大きな「茶」の文字がグラウンド中央に描き出された。開会式では、のちの世界にも様々な影響を与えた古代中国の四大発明である羅針盤・火薬・紙・印刷術が中国を象徴する事物として登場したが、「茶」もそれらに肩を並べるものとして選ばれたのである。しかも同時にこの時の「茶」は、文字で表現されることによって、中国の文字、すなわち漢字を代表するものとしての役割も担っていた（ちなみに開会式では「茶」と「和」というふたつの文字が用いられている）。「茶」は会場を埋めた九万人の大観衆はもちろんのこと、全世界の四四億人ともいわれるテレビ視聴者⁽¹⁾に届き、さらにラジオ、新聞、雑誌、インターネットなどのメディアを通してより多くの人々の耳目に入ったに違いない。開会式で「茶」の映像を目にした瞬間、日頃何気なく茶を愛飲している中国の人々は、ツバキ科の茶樹から摘み取って水に浸してできる飲み物であり、毎日の生活

に寄り添いすぎるあまりにその存在を当たり前のように感じ、その意味についてほとんど考えたこともなく、完全に自己の一部と化した液体について、あらためてその偉大さに気づき、誇らしい古の文明として強い感銘を受けざるを得なかったであろう。

茶は人類にとって偉大な文明である。と同時に、中国の誇るべき文明である。このことはおそらく誰であつても否定のしようがない事実である。茶の発見、飲用、栽培はいずれも古代中国から始まり、世界のほとんどの場所に伝播した。いまや世界人口の四分の三が茶を飲んでいる。このほぼ地球全体を覆っている文明は、まず心身を健康にするという点で人類に大きく貢献している。茶葉は五〇〇種類以上の化学成分が含まれる「地球上で最も重要で強力な薬用物質」であり、仮に現在の生活から突然消失するようなことがあれば、衛生面や精神面からくる心身の不調にとどまらず、多くの死者をもたらし、都市の破壊を招くような「大惨事」の発生までが想定されるという〔マクファーレン 2003/2007: 288-316〕。経済面については、茶葉をめぐるビジネスが、茶葉自体にかかわる生産、加工、流通、消費のみならず、各種の容器や道具、施設やサービスなど多くの分野に及ぶものであるため、茶葉経済は、個人にとつては生計のよりどころであるとともに、マクロ的には世界経済システムの欠くべからざる一部となっている。文化的な面においても、英国のアフタヌーンティーや日本の茶道のような高級文化も茶によつて築かれたものであった。茶は、これほど世界を席卷した大規模な文明なのである。それに付ける形容詞は、「偉大」というほかに相応しいことばを見出すことはできない。

この偉大なる文明を生み出した中国では、国民の日常生活の隅々までが茶とかかわっており、茶の祖国にふさわしい光景を見ることができる。二〇一〇年以降、中国国内では年間一〇〇万トンを超える茶葉が消費され、茶を飲むことを専門に営まれる「茶館」が全国各地の街中に林立している。ほとんどの都市に「茶城」⁽²⁾、茶葉市場

とよばれる大型茶葉販売センターがあるほか、小型の専門店もいたる所で店舗を構えている。博覧会や茶文化観光フェスティバルのような茶文化をテーマとするイベントも全国の様々な都市で開催されている。教育の分野では、小学校・中学校・高校のそれぞれについて、茶文化に関する選択授業や課外授業を開設するところが増えており、大学には茶文化専攻のコースまでが設置されるようになった。家庭においては、家族を癒すばかりか、茶を振る舞うことが来客をもてなす最低限の礼儀ともなっている。ようするに、この文明はいまの中国において、勢いよく生きているのである。

しかしながら、三〇代ないしは四〇代以上の多くの中国人は、三度の食事の間にあり、テレビやパソコンに引き合っているときにはテーブルの片隅に置かれたあの一杯の茶が、オリンピックという世界の舞台上に上ったことに感動を覚えたその次の瞬間、あらためて茶を一口すすってみると、なんとも複雑な後味を感じてしまうのではないだろうか。

一口の茶とともに、おそらく少なくない数の人が、みずからの少年時代から現在までの多くの場面を想起することだろう。茶を飲むことが戒められた過去の生活、配給切符をもって限られた量の茶葉をなんとか手にすることができた経験、突然の来客で慌てて茶葉を購入したり、あるいは白湯しか客に出せなかった苦い記憶。多くの人がこのような思いを抱えているはずである。自分たちが暮らす土地でいくらでも栽培でき、しかも比較的安価なツバキ科の葉を、現在の三〇〜四〇代より上の年代の人々には、ほしのままに手にすることができなかった過去があったのである。

中華人民共和国建国前後の時代、茶葉は崩壊状態にあり茶葉自体が不足していた。さらに茶を飲むことが否定された時代もあった。これらはまだそれほど遠くない昔のことである。文明や文化や社会が時代とともに移り変

わるものとはいえ、このわずか数十年の間に、茶は「無」から「有」を生み出したといえるほどの劇的な変化を経験したのである。

しかも、現在は単なる「有」の状態ではなく、そのような過去の対極にあるかのように、茶の文明が繁栄している。国も企業も研究者も積極的にその保護や育成にとめながら、茶文化を国の重要な文化として国内外に喧伝し、そこから様々な「力」を引き出して活用している。たとえば、北京オリンピック以外の例を挙げれば、一九九一年の北京アジア競技大会、一九九九年の昆明世界園芸博覧会、二〇一〇年の上海万国博覧会、これら国家の一大スペクタクルにおいて、茶はなんらかの形で文化として登場しているのである。国内外での文化交流においても、茶に関する文化的なパフォーマンスが欠くことのできないものとして披露されている。国家の指導者たちは茶を贈り物として外交の場で積極的に利用している。経済面では、単なる商品としての茶葉の取引だけではなく、茶の文化に経済的な価値をつけて商品化をはかる茶文化産業が勢いを見せている。

本研究の出発点は、ここにある。三、四十年前にはまだ多くの国民のテーブルに欠けていた茶が、今日では国家最大の祭典で演出されるまでになり、現実社会においても幅広い分野で大々的に使われるまでに繁栄を遂げている。この変化にたいして、当然次のような問いが発せられるだろう。いったい今日のような茶文化はどのような形で生まれてきたのであろうか。

この問いに、一九八〇年代以降の文化論の主流である伝統の創造論や文化構築主義的な観点から答えれば、茶文化は現代中国のその時々々の政治的・経済的な文脈との関連の中で創り上げられてきたということになる。しかしこの答えにいたるためには、まず、茶文化を創造し再構築したその具体的な政治的・経済的文脈とはどのようなものであり、それはどのようなプロセスを經過し、さらにはそこにいかなる力がはたらいていたのかについて

第三章 台湾茶芸の創出と中国大陸への伝播

台湾における茶葉栽培は、清朝嘉慶時代の一七九六年に福建省の移民が武夷山から持ち込んだ茶樹を植えたところ順調に生育したため、それらの茶樹の種子をもとに広まったとされている。この記載にしたがえば、台湾の茶はわずか二〇〇年ほどの歴史しかない。⁽¹⁾しかし、その間に茶葉は重要な産業の一つにまで成長した。とくに日本統治時代（一八九五～一九四五）には南部の砂糖業と北部の茶業を表す「南糖北茶」ということばが使われたほどであった。茶は砂糖とともに台湾の主要な輸出品となり、一時は輸出の半分⁽²⁾までを占めるほど台湾の経済発展に大きく貢献してきた。

貿易物資としての台湾茶は、一九七〇年代を境に文化として花を咲かせ、目映い^{まばゆ}展開をみせるようになった。七〇年代以降「台湾茶芸」という茶の新しい入れ方や作法が編み出され、それがただちに東～東南アジアの茶文化圏に伝播していった。その頃から、年間生産量が二万トン前後で世界の全生産量の1%にも満たない台湾の茶葉が、アジア、さらには世界中にその影響力を増していったのである。かつて単なる農業輸出品にすぎなかった台湾茶は、「台湾茶芸」という文化の力を構築することで、東方美人茶（白豪烏龍茶の別名）に代表される台湾

高級ブランド茶を生みだし、台湾経済を牽引するにいたったのである。それとともに、台湾すなわち台湾茶、台湾茶すなわち台湾茶芸というイメージが定着し、台湾茶芸に象徴される茶文化が台湾を特色づける一つの大きな要素にもなったのであった。

台湾茶文化の代名詞ともいえる台湾茶芸は、一般に優雅で高級な伝統文化と紹介されているが、実は中国大陸（以下「中国」とする）に起源のある工夫茶を基礎に、わずか三、四十年前に構築されたにすぎない。その後、台湾茶芸は一九八〇年代末期に中国への逆輸入を果たし、当時の中国の国民が渴望していた「文化的」な飲茶のスタイルに恰好のモデルを提供しただけではなく、中国茶文化のナショナルリズム的な展開にも大きな影響を与えることになったのである。

ところで茶の飲用がそれほど盛んではなかった台湾において、なぜ台湾茶芸という茶文化が生み出されたのであろうか。それはどのように台湾社会に広まり、中国に伝播していったのだろうか。一九八〇年代末以降の中国における茶文化の展開を論じる前に、まず本章において、現代中国茶文化の創造と密接に絡み合っているこれらの疑問を解決しておこう。

1 台湾茶芸を育んだ社会変革

台湾茶芸が生み出されたのは一九七〇年代であった。一般に伝統の創造が最も頻繁に案出されるのは、急激な社会変革によって旧来の伝統に適応していた社会的形式がおおいに弱められたり、取りかえられたりした時だとされているが〔ホブズボウム 1992 [1983]:1415〕、一九七〇年代の台湾社会もまさにそのような大変革の時代であった。新しい伝統としての台湾茶芸創出の背景となったのは、台湾社会が経験した経済および文化意識の双方

における変化である。

(1) 工業化・都市化と社会の転換

台湾は長らく農業を中心とする社会であり、砂糖・米・茶・樟脳などの農産品が主な輸出品⁽³⁾として経済発展を支えてきた。農産品の加工や流通にかかわる工業は、ささやかながらも芽生えていたが、日本統治時代におこなわれていた「工業は内地、農業は台湾⁽⁴⁾」という分業的な経済政策などのために、それは単なる農業発展の延長にすぎなかったとされる(宋立水 1996:21-29)。しかも、もともと脆弱であった工業の大部分は、第二次世界大戦中に破壊されてしまったのである。⁽⁵⁾

戦後、国民党が台湾を接収することになったが、中国共産党との国共内戦に苦闘していた国民党が台湾の物資を大量に中国に調達させたことによって、台湾社会の混乱が引き起こされた。さらに一九四九年に国民党が台湾に撤退したさいに、軍人および関連人員が一六〇万人も流入することで台湾経済の混乱が激化し、インフレーションが深刻化していった。そのような混乱状況を收拾するために、国民党は貨幣改革や農地改革などの政策に着手し、五二年からようやく社会が安定的になり、農業や工業の生産が恢復されたのである。

一九五三年から台湾は経済の初期的な転換期に入り、工業化を図るため、輸入代替工業化策が推進されるようになった。しかし当初は、まず基盤となる農業の発展に力を入れ、農産物の輸出で獲得した外貨によって工業を育成するという、⁶以農養工⁷と呼ばれる政策を取っていた(林葉 1978:95)。一九五三年から六二年までの初期転換期において、国民総生産は年間平均七・七%の伸びを示すとともに工業も年間一・六%の成長率を遂げ、とくに紡績・食品などの労働集約型の軽工業が大きく発展したが、産業全体でみれば農業が工業よりも多くの割合を

あとがき

蓋つきの白いマグカップに茶葉を入れ熱湯を注いで茶を飲む親の姿や、来客があったときに魔法瓶にあるお湯ではなくわざわざ新しく沸騰させたお湯で入れた茶を、小学生にもなっていないはずの私が運んでいた記憶が、ふとしたきっかけで思い浮かぶことがある。子供の頃の私は、大人がなぜあの熱くて苦そうな飲み物を好むのか、不思議であった。大きくなるにつれ、知人の家を訪問したさいには、私にも大小様々な白い茶杯が出されるようになった。やがて私も茶館で一杯の蓋碗茶を注文して友達とおしゃべりに興じる週末を楽しみ、街に現れたおしゃれな茶芸館に出かけ、台湾式の茶芸教室の前を通っては中を覗いてみたりするようになっていた。中学生の頃に遠足でいった蒙頂山に再び足を運んだ時は、新しくできた博物館を見学して、そこは世界で最初に茶葉を人工栽培した茶葉史上における重要な場所であり、蒙頂甘露が献上茶であったことなどを学び、おみやげとしてそれを購入した。

二〇〇六年に来日するさいに、大きなスーツケースの中には家族や親戚が用意してくれた故郷の茶葉が入っていた。しかし日本でお世話になる人々におみやげとして贈ると、自分の飲む分がなくなってしまった。茶のないあの半年の留学生活は、まるで家族も親友もいなくなってしまったかのように寂しかった。それまでの、茶があつて当たり前前の人生を思い返す中で、あらためて茶がもつ力に気づかされた。人間の生活における茶は、意識しなければ気づかないけれども、しかしあると愉快に感じる笑顔のような存在であろう。

大人はなぜ茶を好むのか、自分が大人になってからやっと分かったような気がした。しかし、分かったような

気がただけである。それを論理的・学問的にどう説明すればいいのか。そもそも、子供の頃の記憶の中にある両親にとつての茶と、いま授業の合間に口にして私にとつての茶は、果たして同じものなのだろうか。このようなごくごく私的な出発点から、本書の研究は始まっている。

本書は、二〇一四年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した学位申請論文をもとに加筆修正をおこなったものである。来日十年という節目の年に、これまで学んできたことを一書として世に出すことができたのは、学業においても生活においても、多くの方々からいただいた多大なご指導とご支援のおかげである。

未熟な私を留学生であるからといって特別視することなく、厳しくも優しく見守ってくださった指導教授の多和田裕司先生には、お礼を申しきれないほどお世話になった。研究への取り組み方はもちろんのこと、たった一つの日本語の文章までも丹念にご指摘いただくなど、普通の学生の何倍もの手間ひまをかけてくださった。師に恵まれたからこそ、苦しいときでも研究を続けることができたのだと思う。また院生の間在籍したアジア都市文化学教室の先生方、大阪府立大学の橋爪紳也教授、早稲田大学の早瀬晋三教授には、日ごろから多くのご指示やご助言をいただいた。心より感謝申し上げます。本書が、先生方から頂いた学恩に、わずかながらでも報いるものとなることを願っている。

本書での考察のもとになった資料収集のための三回の海外調査では、多くの方々との出会い、調査の便宜を図っていただいた。とくに江西省社会科学学院の陳文華教授（故人）、余悦教授、中国国際茶文化研究会の宋少祥名誉会長、中国国際茶文化研究会書画院の李茂榮先生、元『茶博覧』編集長の阮浩耕先生、元浙江大学茶学系の徐南眉教授、浙江樹人大学の関剣平准教授、『喫茶去』の舒曼編集長、谷本陽藏先生（故人）、台湾区製茶工業同業公会の黄正敏理事長、中華茶文化学会の范增平理事長からは、貴重な資料のご提供と有益なご助言をいただいた。

また杭州市茶樓業協会の徐菲菲氏には調査先の斡旋や何度も訪問先へ同行していただくなど、実にお世話になった。参与観察先の紫藝閣茶坊の陳珂総経理および従業員の方々、またそこでインタビューに応じてくださった方々にもご協力をいただいた。この場を借りてご助力を賜った皆さまに、厚く御礼を申し上げます。

奨学金の支援なしでは、留学生生活を長く続けることはなかったであろうし、研究に専念することもできなかったに違いない。日本学生支援機構からの留学生生学習奨励金（二〇〇七年度、二〇〇八年度後期、二〇〇九年度）、三菱商事外国人留学生奨学金（二〇一〇～二〇一一年度）、文部科学省国費外国人留学生奨学金（二〇一二年度）のご援助によって、日本での研究を続けることができた。また大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターのインターナショナルスクール若手研究者等若手海外派遣プログラムからは、海外調査旅費のご支援をいただいた。それぞれの機関および関係の皆様方に感謝を申し上げます。

これまでの研究を一冊の本として刊行するにあたって、大きなご支援を頂いている。公益財団法人三徳庵からは本書出版にさいして「茶道文化学術助成金」を頂くことができた。さらにそれを形にできたのは、出版を引き受けて下さった思文閣出版、ならびに編集の企画・実務をご担当下さった同社の田中峰人さんと大地亜希子さんのおかげである。末筆ながら、これらご援助を下さった皆様方に深く感謝申し上げます。

二〇一七年一月

王 静